

これからの地域福祉について

活動先：愛光園 知多地域障害者支援センターらいふ
クラス：松下 典子 先生

地域住民のニーズを形にしたものが NPO であると、今回の学習を通して学んだ。高齢者施設や障害者施設の必要性は、講義で学ぶことができる。しかし、本当の学びとは机の上で行うものだけでなく、実際の現場で感じたこと、ふれあいを通して自ら気づくことから得られるのだと学んだ。

学びの一つ目として「個人の違いと理解」を挙げる。

私の活動先は障害児を対象としており、特に自閉症の利用者が多数を占めている。しかし、同じ自閉症を持つ利用者でもその個人個人によって障害のレベルや特徴、好みなどに異なりを見る。また、利用者自身の体調やその日の天気、気分によりできること、状態の安定度にも差が出てくる。支援者側は個人の持つ特性や、日々の状態を見極める知識と経験が求められるのだと学んだ。

学びの二つ目は、「コミュニケーション方法」である。

コミュニケーションは今回の学習の大きな課題の一つでもあった。障害児と実際に関わりを持ったことがなく、その上、障害について書籍からでは十分に理解ができてなかった。そのような状態で活動に望むことになり期待よりも不安が多かった。自閉児の特性は本当に様々で、全く会話が行えない子どももいれば、ある程度会話が出来る子どももいた。しかし、会話ができなくても絵や表情から意思疎通ができた。施設の職員の方の熱心な指導、姿勢や施設内の雰囲気よかったこともあり、活動を進める中で緊張や、不安も次第になくなっていった。そこで気づいたことは子ども達の職員と関わる時と、私達学生と関わる時の態度の違いや職員の子どもの達とのかかわり方である。

施設職員の方からの私達に対する指導の中に“見守る姿勢”というものがあった。それは子供達が将来社会で生活していくために、自立を促進し、自己決定能力を身に付けていくということである。私達に求められた支援は、子ども達の身の回りのこと全てを行うのではなく、子ども達の危険回避や自分でできる事を増やすサポートを行うことである。しかし、最初に述べたように私自身に慣れるまで、不安や緊張があった。自分なりに緊張や不安を表さないようにしていた。だが、子ども達には伝わったようで、無理なお願いや甘えた態度を見せてきた。最初は子ども達なりのコミュニケーションだと考えていたが活動進める中で自分がためられているのだと考えが変わった。正しいコミュニケーションは、甘やかしたりするのではなく日々同じ目線で生活支援していく中で構築できるのだと気づいた。

学びの最後は、「日々の成長」である。

私はこれまで部活や勉強など、様々なことに取り組んできた。その中で、できないこと、

苦手なことに限界を決めてしまうことがあった。しかし子ども達と日々過ごし、困難に打ち向き合うことや苦手なことを克服していくこと、前向きな気持ちを教えられた。活動先の施設では、子どもたちの社会生活を可能にするため自立課題というものをとりいれている。それは、子どもたちにとって難しかったり、苦手だったりする。しかし、私達が活動した短い期間の中でも“出来る”子供達がたくさんいた。昨日より今日というように、日々努力する姿勢を子ども達と関わり教えられた。

これらの学びから、サービスマーケティングを通して自分で考え、行動する力が身に付いたと感じる。そして考えを深めていくことで社会の様々な課題が見えてきた。

まず一つは、障害について正しい理解と認識を進めていくということである。まだまだ障害者が単独で生活することは難しい。それは社会での障害についての理解と知識の広まりがなく、そのため、障害者やその家族が肩身の狭い思いをしているためである。私達は、全ての人々が社会で、その人らしく当たり前の生活が出来るよう社会の考え方から変えていかなければならないと考える。

二つ目は、福祉施設の拡大である。この問題の背景には、個人の生活運営と大きな関係がある。なぜなら、福祉職からの給料だけでは生活していくことが厳しいため、福祉職を就職先として考える人が少ないため人員確保できないからである。今後、住みよい社会を考えていく上でもこの問題に対する解決策を考えていかなければならない。

以上のことからサービスマーケティングを通して自分自身の成長と共に、地域についても考えることが出来た。私達が生活する地域で生涯過ごすためには一人一人が考え行動していくことが大切だと思う。私は学びから得た知識を活用し地域福祉について考え、地域の為に活動していきたいと考える。

2010年8月27日（金）：近くのコンビニで買い物練習

